

## マーク・ロスコの《ダーク・ペインティング》 その源泉と造形についてー

熊本市現代美術館 芦田彩葵

マーク・ロスコ（1903-1970）の晩年の作品である《ダーク・ペインティング》は、ロスコ様式と並行して、1968年から創作されたシリーズの総称である。一見すると、それまでのロスコ様式の作品に対して、その造形性において大きな相違があるように見えるが、大動脈瘤を患い、体の自由が利かないロスコが、この形式の作品を徐々に大型化させ、2年もの間、繰り返し制作したということは、《ダーク・ペインティング》が、単なる実験的シリーズではなかったことを意味している。《ダーク・ペインティング》に対するこれまでの見解は、ロスコの晩年の生活、精神的内面性、時代背景に基づいて論じられることが多かった。無論、それらは《ダーク・ペインティング》を解釈するにあたって重要な要素ではあるが、《ダーク・ペインティング》の表現様式そのものに対する考察については、これまであまりされてこなかった。そこで、発表者は、《ダーク・ペインティング》の表現性に立ち返り、ロスコ芸術における《ダーク・ペインティング》の位置付け、ならびにその意義について、検証したい。

本発表では、《ダーク・ペインティング》の様式の特徴となっている、二層構成、モノクロームの色彩、カンヴァスの周囲を囲む白い枠を中心に考察する。この層構成は、ロスコの絵画様式の変遷において度々登場しているが、中でも、ロスコが抽象画へと移行する起点となったシュルレアリスム時代に顕著に出現しており、色彩においても《ダーク・ペインティング》を暗示させる作品が散見される。従って、《ダーク・ペインティング》とシュルレアリスム時代の作品には、密接な関連があると思われる。《ダーク・ペインティング》では、上層が黒、下層が上層より明るいグレーもしくは茶色で描かれているが、ロスコの作品や発言を辿ることで、上層の黒い部分が死を、下層の明るい部分が復活を表していると推測できる。さらに枠の表現は、ロスコの具象絵画時代から始まる重要な表現要素であることが判り、ロスコが抽象画を制作し始めた後も、それらの作品には窓を思わせる枠の表現が用いられていた。従って、《ダーク・ペインティング》は全く新しい様式ではなく、これまでのロスコ芸術に繰り返し用いられてきた要素から構成されており、《ダーク・ペインティング》の誕生は、ロスコ芸術の本質を示す展開であったといえる。

以上、本発表では、ロスコ絵画の特徴であった鮮やかな色彩と矩形を廃し、色も形もないモノクロームの世界に新境地を開拓しようとした《ダーク・ペインティング》は、その主題においても様式においても、ロスコ芸術の集大成であり、必然的帰結であったことを検証する。さらに、《ダーク・ペインティング》のイメージの源泉として、夜明け前の海の情景があったという可能性を示す。